



TITLE:

<批評・紹介>李獻璋著「媽祖信仰
の研究」

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>李獻璋著「媽祖信仰の研究」. 東洋史研究
1985, 44(3): 538-540

ISSUE DATE:

1985-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154124>

RIGHT:

李 獻 璋 著 媽祖信仰の研究

日 比 野 丈 夫

李獻璋氏の大著『媽祖信仰の研究』が出てからすでに六年がたった。これを熟讀して紹介することは、早くから私に課せられた任務だったが、つい俗事に取り紛れて遅延していたのは著者に對してはもとより、學界に對しても申譯けないしだいである。本書は第一篇「媽祖傳説の展開」、第二篇「歴代の封賜より見たる媽祖信仰の消長」、第三篇「媽祖信仰の發生・傳播及びその影響」、附録三論文のほか資料篇「有關媽祖文獻資料集」よりなり、計七五〇頁を越える。著者によると、中國の民間神信仰の研究は、傳承を主とし文獻を排除した民俗學的方法のみには頼れないのであって、文獻資料の活用が重要な意味をもつ。つまり神が靈驗をあらわすと、歴代の王朝はこれを祀典に編入し封賜して報恩の意を表したのであるから、その記録はこの神の信仰の發展、傳播を歴史的にものがるものだという。この考えには私も全面的に賛意を表するもので、かつて山西の關帝廟や鹽池廟の由來を調べたときには、このような記録を根本資料とした経験がある。

まず媽祖傳説の原初形態として、北宋末期（一二世紀初）には漠然と福建地方の航海安全の神という、あいまいな存在だったのが、約一世紀後の南宋末には、莆田縣湄州の林氏の女と、本籍や姓氏が付與されるようになった。それが元代から明初にかけ一世紀餘りの間に、いろいろの傳説が加わり、媽祖説話の骨組が形作られたので

ある。媽祖の生誕が五代の閩國時代あるいは宋初のこととされ、生日を春三月二十三日（卒日は秋）とするようになったのもこの間のことで、道教の神となって明初にはすでに『太上説天妃救苦靈驗經』というものも作られていた。明代後期には佛教とも結びついて『三教搜神大全』にみえるように、その説話に新しい要素が加わり、さらに『西遊記』から多くの題材を取り入れた『天妃娘娘傳』という章回小説もあらわれた。説話の一部は袋中の『琉球神道記』や菅江眞澄の『天妃緣起』に傳承され、江戸時代の日本人にも知られた。前者は明代後期に中國と琉球との交通が密接になったためであり、後者は日本における媽祖信仰が九州から北上して下北半島にまで達した結果である。明末には媽祖に關するさまざまな文獻や説話を集大成した『天妃顯聖錄』が作られて、莆田湄州の媽祖廟から刊行され、清代の乾隆末には『天后聖母聖蹟圖志』が出て、『天妃顯聖錄』に代り天下に普及し、媽祖信仰の基礎文獻となった。

以上は媽祖信仰の起原と展開で、第一篇のきわめて簡単な要約である。最後の第五章「琉球蔡姑婆傳説考證」は直接に媽祖傳説に關したのではないが、『東洋史研究』第一七卷第二號（昭和三二年九月）に掲載されたものに改訂を加えたという。第二篇は歴代の封賜からみた媽祖信仰の變遷である。文獻にみえる最初は宣和五年、路允迪が高麗國信使として派遣されたとき、媽祖が海上で靈具をあらわしたので順濟の廟額を賜い、紹興二十六年に靈惠夫人に封じ、同三〇年に昭應、乾道三年に崇福、淳熙二十二年に善利の夫人號を加封、紹熙四年には女神最高位の靈惠妃に封ぜられた。金國と對戦のさい、宋では福建水軍の活躍に期待することが大きく、その守り神である媽祖もこれに應じてたびたび靈具をあらわしたからで、その

後も引き續き助順、顯衛、英烈、嘉應等々の加封が行われたのである。元代、至元一八年に護國明著天妃に封ぜられたのは、海運の安全に靈驗を期待したからであり、大徳三年には庇民、延祐元年には廣濟、天曆二年には福惠、至正四年には輔聖の封號が加えられ、全國的な航海守護神としての地位を確立した。

明初にも海運の安全を祈って、洪武時には妙靈、昭應、永樂時には弘仁、普濟などの封號が加えられた。永樂の加封は鄭和らによる南海經略に當り船中に媽祖を奉祀し、そのたびに靈驗をこうむったため、國家的尊崇がにわかに高まった結果である。のちには琉球を始め朝鮮、日本への遣使船もその恩恵にあずかっている。しかし、明朝の媽祖に對する封賜はその後殆んど行われたことがなく、主に民間信仰として漕運に従事する舟師たちの間にひろがり、運河沿線の要地に廟祀されることが多くなった。清代でも政府と媽祖との關係は琉球に對する冊封船が加護を受けたのに始まり、臺灣に據った鄭成功の子の經を討伐するにさいし（康熙一九一二年）靈異をあらかわして天后に封ぜられ、その後は朱一貴の亂（康熙六〇年）、林爽文の天地會の亂（乾隆四九一五三年）が平定されたときに福佑群生、顯神贊明などの封號を賜った。

第三篇は福建の一僻地に發生した媽祖信仰が、各地に傳播した經過と影響をのべている。發生時期は北宋の元祐元年（一〇八六）のころ、莆田縣寧海鎮に神異があらわれ、聖屯というところに廟祀されたのに始まり、宣和五年の高麗遣使船の遭難を救い、のち宋・金の水上戦における福建水師の活躍とともに、その信仰が各地にひろがった。廟は莆田縣内では江口、白湖のものが古く、湄州に作られたのは年代的にはかえって新しいようである。廟の分布はもちろん

福建に多いが、北は浙江（杭州、寧波、温州、台州）、江蘇（松江、蘇州、鎮江、江寧）、南は廣東（とくに潮州）方面へも傳播した。

元代には江浙において漕運の代表的守り神として官民から強い信仰を獲得し、さらに北に進んで山東、河北の海岸地域や運河の沿線に進出した。廣東では潮州のほか廣州、雷州、瓊州などで勢力を擴張していったのである。澎湖島は元代に中國の領土となつてから、中國人の移住が始まり、明代にはその數がますます多く、媽祖の祠廟もあちこちに作られた。臺灣が實際に中國と關係をもったのは明代からで、嘉靖、萬曆の間に福建の貿易船が來て先住の倭商と取引し、あるいはそこに居住したのが初めである。ついでながら、通説では中國の海賊、林道乾や林鳳が明軍の追撃を逃れて臺灣へ行ったように伝えられるが、その事實はない。臺灣の中國人は赤崁（ゼーランジア）を中心として發展し、鄭氏がオランダに取つて代るとその數は一層増加したが、みな媽祖を信仰し、清代には全島にひろまった。臺灣では鹿耳門、安平、赤崁の廟がもっとも古く、清代の中期以降は北港の朝天宮が全島の媽祖信仰の中心となっている。

沖繩の媽祖信仰も明との交通が盛んになり、中國人が那覇に來住するに及んで始まったもので、その居住地である久米村の唐營に最初の媽祖廟が作られたと考えられる。これが上天妃宮で、ついで那覇の町にも琉球王の發議によつて下天妃宮が立てられた。中國からの冊封使船には媽祖を祀つて行つたが、那覇に入港すると鼓樂儀仗をもつて神體を上天妃宮に迎え入れたのである。清代になると乾隆二一年、久米島で坐礁した冊封使船が媽祖の靈異によつて救助されたのを感謝して、そこにも天后宮が立てられた。薩摩は明代には中國ともっとも深い關係にあり、通商のため、あるいは倭寇に拉致さ

れてきて同地に居住する中國人が多かった。その中心は坊ノ津と都城の二地で、そこには往時、媽祖を祭祀していたと考えられる遺跡が少くない。とくに坊ノ津の笠砂御崎、野間嶽の娘媽祠は有名で、同嶽は娘媽山とも呼ばれた。野間とは娘媽の發音を訛って日本化したのだという説をなしたものがあるが、これは思い過ごしであろう。長崎では中國からの來航船が船内の媽祖像を上陸させ（菩薩揚げ）、一時的に奉祀する場所として同郷人の集會所である會館などが利用され、それがもととなって唐寺に發展した。唐寺の起原は來航の中國人がキリシタンでなく、佛教徒であることを證明するために立てたのだという説もあるが、それは誤りである。福濟寺（漳州寺）、興福寺（南京寺）、崇福寺（福州寺）のいわゆる長崎の三唐寺には、佛殿と並んで媽祖殿が立てられたのはその由來をものがたっている。媽祖信仰が元祿以後には東日本へも傳播した例として、常陸と下北半島とがあげられる。常陸では徳川光圀に招聘された中國僧心越によって、水戸城下と磯濱・磯原とに祀られ、下北半島では同地の船主によって水戸から勸請されたのである。

以上が第三篇のおおまかな筋書きである。附録として、第一に臺灣の築港聚落の成立とその媽祖信仰、第二に宋元時代中國人の澎湖と臺灣に關する知識、第三に蒲壽成・壽庚兄弟の事蹟についての三論文を收載している。第三のものは、學界の定説とされてきた、蒲壽庚が宋の提舉市舶の官職にあったことを否定し、またかれがアラブ人であったというのは誤りであると斷じた新説である。

本書を通讀して感ぜられるのは、著者が舊來の通説を徹底的に見直そうとして、根本資料に體當りをしている熱意が到るところに見られることである。著者が媽祖研究を手がけられたのは早稻田大學

哲學科在學中で、昭和一八年それをまとめて卒業論文にされたとのことであるから、この研究は實に四十餘年にわたり絶えまなく續けられてきたといつてよい。その間に、媽祖に關してあらゆる傳承と文獻資料を搜集して比較検討し、緻密な考證を重ねて着實な結論を導き出すようにつとめられてきた。とくに資料としては龐大な地誌類を廣く涉獵して、從來見落されていた關係記事を意義附けたことなど、著者獨特の見識が到るところにあらわれている。本書は媽祖信仰の歴史だけに止まらず、宋元以後、明清にわたった中國の東南海岸地帯の變遷、臺灣・沖繩・日本との海上交通史の解明の上にも、一大功績を残したといふことができよう。教えられたことのうち一、二書き漏らしたことを拾えば、從來は元代の著作と考えられていた『三教搜神大全』は、明代になって新舊材料を取捨して作られたものであること、鄭和の南海經略は永樂三年から宣徳六年に至るまで七回であったとする説が行われているが、永樂五年の第二回出使といわれるものは、鄭和とは直接關係がなく、實は王貴通（王景弘と同人）が行ったということなどである。しかし、これだけの大著であるから、もちろん瑕瑾なしとしない。もっとも初歩的な一例をあげれば、明末の『天妃顯聖錄』に媽祖の出自をのべたところにみえる、道士の玄通、玄微秘法などが、乾隆末の『天后聖母聖蹟圖志』では玄をいずれも元に作っていることに特別の理由を求められているようであるが、これは康熙帝の諱を避けたのに過ぎないと思う。

一九七九年八月 東京 泰山文物社發行

A5版 七六八頁 一一五〇〇圓